

早稲田大學東洋哲學會 第四十回大會

〈研究發表および講演要旨〉

【研究發表】

『寶性論』における謗法について―第五章第二十偈の變容から見て―

蔣 天任

『究竟一乘寶性論』は、インド佛教の如來藏思想を體系的に説く論書であり、その第五章第二十偈は「謗法」を戒める内容である。しかし、現存最古の譯本である勒那摩提の漢譯（六世紀初）は、「謗法」という概念に、現存する梵本およびチベット譯とは異なる獨特な定義を與えている。本發表では、『寶性論』第五章第二十偈前後の文脈を考察しつつ、諸本を比較することによって、テキストの流動性を明らかにし、『寶性論』の「謗法」思想の、中國における獨自の展開について考察する。

平安後期における謗法者の往生をめぐる議論―『淨土嚴飾抄』と『決定往生集』を中心に―

松尾 善匠

『無量壽經』では、五逆人と謗法者は極樂往生できないと説かれるのに對し、『觀無量壽經』には、五逆人が臨終に十念して往生を遂げるという記述が見られる。五逆人と謗法者との往生の可否をめぐる、中國・新羅・日本の諸師は種々の解釋を示した。これまでの研究では、この議論を「逆謗除取」として一括りにする傾向にあるが、謗法者と五逆人の往生は、本來別個の問題として捉えるべきである。本發表では謗法者の往生という問題を取り上げ、これをめぐる議論がどのように展開したか、特に平安後期に示された諸説を取り上げて考察したい。

十八世紀日本の「正名」―朱子學者を中心に―

清水 則夫

十八世紀の日本で「正名」が大きなテーマとなったことはよく知られている。『論語』に由來する「正名」は、徂徠學派の隆盛後には彼らに對する批判で重要な位置を占め、漢詩文にまつわる議論の中で、日本の儒者の自國認識が重大な問題となった。この議論は近代以降にまで影響したとされる。しかし先行研究は、ともすれば後世の價值觀が混じり、同時代の文脈に十分配慮されているとはいえない。そこで本發表では、この問題を徂徠學派批判という文脈に即し、批判の中心的擔い手であった朱子學者を主たる事例として、再検討する。

『玄義覺要鈔』所收の論義について

松本 知己

叡山版の願主として知られる承詮（一二一三〜？）の『玄義覺要鈔』は、『法華玄義』或いは『法華玄義釋籤』の解釋に關する問答と典據を簡潔に記した論義集であり、卷三、四、七が現存する。その特徴は、各卷に收載された論題の過半数に、宗内外の論義における出題例が傍記されている點にある。宗外の出題例は、ほとんどが三講（最勝講、仙洞最勝講、法勝寺御八講）のものである。そこで『覺要鈔』所收の論義を、證眞の著作や『法華玄義伊賀抄』などと照合し、三講の論義を日本天台の教學研鑽の展開に位置付け、その意義の一端を解明する。

六朝道教における火鍊

廣瀬 直記

道教には仙人になるための技術としてさまざまな存想法（瞑想法）があり、そのうちの一つに火によって體が焼き直されることをイメージする方法がある。火鍊とも呼ばれるこの方法は、一方で死者の救済にも適用された。本發表では、火鍊存想法の系譜をたどると同時に、それと並行して行なわれた火鍊による死者救済をめぐるいくつかの問題――たとえば、焼き直されるのは肉體なのか魂なのか、焼き直された肉體あるいは魂はどこへ行くのか、などを六朝期の資料を中心に検討したい。

【講演】

普渡と鍊度

松本 浩一

現在でも中國各地で盛んにおこなわれている、道教の普渡（日本という無縁佛の供養）儀禮や葬送儀禮の形式が整ったのは、北宋から南宋にかけての時代であった。ここでは始めに道教における儀禮の位置付けと特色について述べた後、現在取り組んでいるテーマである普渡の思想的・社會的背景、その成立過程について論じる。そして普渡を構成する諸儀禮の中でも特に道教の特色をもった鍊度儀禮と、その簡略化された儀禮で崇りを避けるための呪術としても行われた祭鍊について述べ、現在への影響についても紹介して行きたい。